

# 人造人間戦車の機密

——金博士シリーズ・2——

海野十三

青空文庫



魔都上海まとシヤンハイに、夏が来た。

だが、金博士きんはかせは、汗もかかないで、しきりに大きな手押式ておししきの起電機きでんきを廻している。室内の寒暖計は、今ちようど十三度を指している。ばかに涼しい室へやである。それも道理どうり、金博士のこの実験室は、上海の地下二百メートルのところにあり、あの小うるさい宇宙線も、完全に遮断しやだんされてあるのであった。

天井裏のブザーが、奇声きせいをたてて鳴った。

「ほい、また来客か。こう邪魔をされては、研究も何も出来やせん」

博士は、例の無精髭ぶしようひげを、兎の尻尾うさぎしっぽのようにうごかして、天井裏を睨にらみつけた。

「博士、御来客です。鬻買石閣下しやうかいせきかつかの密使みつしだそうです。はい、只今、X線で、身体をしらべてみましたが、何も兇器きやうつきは所持して居りません。どういたしますか」

姿は見えないが、声だけの秘書が、用事を取次いだ。

「何か土産みやげを持つている様子か」

「なんだか、大きな風呂敷包を、背負って居ります。どうやら羊か何からしく、X線をかけて、長い脊髄骨せきずいこつが見えました」

「羊の肉は、あまり感心しないが、糧食難の折柄おりがらじや、贅沢ぜいたくもいえない」

「では、通しますか」

「とにかく、こつちへ通してよろしい。土産物を見た上で、話を聞くか、追払おっぱらうか、どつちかに決めよう」

博士は、把手ハンドルから手を放すと、手をあげて、秃頭はげあたまをガリガリと搔かいた。

醬の密使油踏天氏ゆうとうてんが、その部屋に現れたのは、それから五分ばかりたつて後のことであつた。

「おう。油踏天か。お前が来るようじや、大した土産もないのであろう」

博士は、密使の顔を見て、率直に落胆らくたんの色を現した。

「いや、博士。本日は、わが醬主席の密命を帯びてまいりましたもので、きつと博士のお気に入る珍味ちんみをもつてまいりました」

「羊の肉は、くさくて、嫌いじや。第一、羊の肉が、珍味といえるか」

「羊の肉ではございません。なら、用談より先に、これをごらんに入れましょう」

密使は、背中に負っていた大きな包を、機械台のうえに下おろした。博士は、鼻をくんくんいわせながら、傍そばへよつてきた。

「燻くんせい製じやな。いくら燻製にしても、羊特有の、あの動物園みたいな悪臭は消えるものか」

「まあ、黙つて、これをごらん下さい」

密使油が、包を派手にひろげると、中から鼠ねずみいろ色の大きな動物が現れた。顔を見ると、やはり鼠に似ていた。

「ほう、これは大きな鼠じやな」

「金博士。鼠ではございません。これはカンガルーの燻製でございます」

「カンガルーの燻製？」

博士は、目を丸くして、両手を意味なく、ぱしんぱしんと叩いた。

「さようです。カンガルーです。これは只今醬主席の隠れ……あ、むにやむにや、ソノ、特別特製でございます」

「特製はわかったが、むにやむにやというところがよく聞えなかつたし、一体これは、ど

この産じや」

「はあ、それは御想像に委まかせるといたしまして、とにかく醬主席は、かような珍珠を博士に伝達して、その代り、博士におねだりをして来いということでありました」

「なんじや、わしにねだるといふと、また新発明の兵器を譲れというのじやろう。昔の因縁んねんを考えると、わしとて、譲らんでもないが、しかしあのように敗けてばかりいるのでは張はりあ合いがない。——で、当時とうじ、醬の奴は、どこにいるのか。重慶じゅうけいか、成都せいとか、それとも昆明こんめいか」

博士の質問は、密使油にとつて、甚はなはだ痛いたかった。当時、醬主席およびその麾下きか百万余名は、その重慶にも成都にも、はたまた昆明にも居ゐなかつたのである。

「は、それはわが政権の機密に属する事項じこうでございますから、私から申上げかねます。しかし、主席はぜひ博士の御好意によつて、最近御発明になつたあの……」

といいながら、密使は一応四方八方へ気を配つた上で、

「……あのう、それ、人造人間戦車じんぞうにんげんせんしゃの設計図をお譲り願ゆずつてこいと申されました。どうぞ、ぜひに……」

「あれッ。ちよつと待て。わしが極秘ごくひにしている人造人間戦車の発明を、どうして、どこ

で知ったか」

「それはもう、地獄耳じごくみみでございます。それを下されば、このカンガルーの燻製を置いてまいります。下さらなければ、折角せっかくですが、カンガルーの燻製は、再び私が背負いまして……」

「わかったよ、もうわかった。あの醬め、わしが、珍味に目がないことを知っていて、大きなものをせびりよる。よろしい。では、その設計図をやろう。これが、そうだ。組立のときには、わしに知らせれば、行って指導してやってもいい。しかしそのときは、うんと代償物だいしょうぶつを用意して置けよ」

そういつて、金博士は、大きな青写真にとった設計図を、惜し気おしげもなく密使に渡してしまったのであった。

有頂天うちやうてんになつて、“人造人間戦車”の設計図を押し戴いたいて、三拜九拜しているのは、珍らしや、鬻買石しょうかいせきであつた。

鬻は、サロン一つの赤裸あかはだかであつた。頸くびのところ、からからんと鳴るものがあつた。それはこの土地に今大流行の、獸けだものの牙を集め、穴を明けて、純綿じゆんめんの紐を通した頸飾くびかざりであつた。鬻は、このからからんという音を聞かたびに、寒山寺かんざんじのさわやかなる秋の夕暮を想い出すそうである。——なにしろ、ここは、人跡じんせきまれなる濠洲ごうしゅうの砂漠の真只中ただなかである。詰襟つめえりの服なんか、とても苦しくて、着ていられなかつた。

この砂漠に、鬻麾下きかの最後の百万名の手勢てせいが、炎天下えんてんかに色あげをされつつ、肅々しゆくしゆくとして陣を張つていたのであつた。

これは余談よだんに亘わたるが、彼れ鬻は、日本軍のため、重慶じゆうけいを追われ、成都せいとにいらなくなり、昆明こんめいではクーデターが起り、遂に数奇すうきを極きわめた一生をそこで終るかと思われたが、最後の手段として、某所ぼうしよに於て、英国政権に泣きつき、その結果、或る交換条件により、鬻およびその麾下は、海を渡り、赤道を越え、遙かにこの南半球の濠洲のサンデー砂漠地帯くかくの一区劃いちくわくに移駐いちちゆうすることを許された次第しだいであつた。

ここでは、熱砂ねつさは舞い、火喰ひくい鳥は走り、カンガルーは飛び、先住民民族たる原地人は、



幅の広い鼻の下に白い骨を横に突き刺して附近に出没し、そのたびに、青竜刀がなくなったり、取っておきの老酒の甕が姿を消したり、泣き面に蜂の苦難つづきであったが、しかもなお彼は抗日精神に燃え、この広大なる濠洲の土の下に埋没している鉱物資源を掘り出し、重工業を旺んにし、大機械化兵団を再建してもう一度、中国大陆へ引返し、日本軍と戦いを交えたい決意だった。それからこつちへ十年、遂にこの砂漠の一劃に、十年計画の重工業地帯が完成したのを機に、密使油踏天をはるばる上海に遣して、金博士の最新発明になる「人造人間戦車」の設計図を胡魔化しに行かせたのであった。

今や工学士油踏天は、大任を果して、めでたくこの砂漠へ帰ってきたのであった。醬の喜びは、察するに余りある次第であった。

「おい、油学士。見れば見るほどすばらしい製図ではないか」

醬は、どう褒めてよいか分らないから、製図の見事なところを褒めることにした。

「はい。それだけに、私の苦心の要ったことと申したら、主席によりしくお察し願いたい」  
 「それはよろしく察して居る。褒美には、何をとらせようか。カンガルーの燻製はどうだ」  
 「いや、カンガルーは動物園のような臭いがしていけません。——いや、それはともかく、

想像していた以上に、これは実に立派にひかれた製図でございしますが、更にその内容に至つては、正に世界無比の強力兵器だと申してよろしいと存じます」

「それで、わしには鳥渡ちよつと分らんところもあるから、お前、この図について、報告せよ。一体、〃人造人間戦車〃とは、どんなものか」

とにかく御大将おんたいしやうともあれば、威厳いげんをそこなわなないことには、秘術を心得て居る。

「はは。そもそも金博士の発明になる人造人間戦車とは……」

油学士は、前後左右、それに頭の上を見渡し、砂漠の真中の一本のユーカリ樹じゆの下には、主席と彼との二人の外、誰もいないことを確かめた上で、

「……人造人間戦車とは、ソノ……」

「早くいえ。気をもたせるな。褒美は、なんでも望みをかなえさせるぞ」

「はい、ありがとうございます。さて、その人造人間戦車とは、実に、人造人間にして、且つ又、戦車であるのであります」

「余よには、さつぱり意味が分らん」

「つまり、ソノ金博士の申しまするには、ここに百人から成る人造人間の二隊がある」

「ふん。人造人間隊がねえ」

「この人造人間隊が、隊伍を組んで、肅々前進してまいります。お分りでしょうな」

「人造人間隊の進軍だね」

「はい。このままで放つて置けば何日何時間たつても、遂に人造人間隊でございしますが、必要に応じて、司令部より、極秘の強力電波をさっと放射いたしますと、これがたちまち戦車となります」

「そこが、どうも難解だ。極秘の強力電波を放射すると、なぜ人造人間隊が戦車となるのか。お前の話を黙って聞いていると、まるで狐狸の類いが一変して嬋娟たる美女に化けるのと同じように聞える。まさかお前は、金博士から妖術を教わってきたのではあるまい」

醬主席の言葉は、油学士の自尊心を十二分に傷つけた。

「どうもそれはけしからん仰せです。かりそめにも、科学と技術とをもってお仕える油学士であります。そんな妖術などを、誰が……」

「ぶんぶん怒るのは後にして、説明をしたがいいじゃないか。お前は、すぐ腹を立てるか、立身出世が遅いのじゃ」

主席に、一本きめつけられ、油学士は、はっと吾れにかえったようである。

「はつ、これは恐縮きょうしゆく。で、その秘術は、かようでございませう。只今申した極秘の電波を人造人間隊にかけますと、その人造人間隊は、たちまちソノー、主席はフットボールを御覧になったことがございませうか」

「余計なごま化かしはゆるさん」

「ごま化しではございませぬ。フットボール競技に於て、さつとプレーヤーが、さつとスクラムを組みますが、つまりあれと同じように、人造人間が、たちまちスクラムを組むの  
でございませう。そしてたちまち人造人間のスクラムによつて、一台の戦車が組立てられま  
して、こいつが、轟々ごうごうと人造人間のキャタピラを響ひびかせて前進を始めます。いかがで  
ございませうか。これでもお気に召しませぬか」

## 3

醬主席は、今や極上ごくじやうじやう々々の大機嫌だいきげんであつた。

彼は、毎朝早く起きて、砂漠の下の防空壕を匍いだと、そこに出迎えている常用戦車の中に乗り込み、文字どおり砂塵を蹴たてて西進し、重工業地帯へ出動するのであった。

そこでは、これまた、得意の絶頂にある油踏天学士が待っていた。彼は、この重工業地帯長官ということになっていて、かの金博士の発明になる人造人間戦車の部分品の製造監督に、すこぶる多忙を極めていた。

「どうじやな、油学士。どうも生産スピードが鈍いようじやないか」

醬主席が到着すると、すごい出言言葉はこれであった。工場の中を見ないうちに、このおきまり文句をぶつばなすところが、主席の得意な嚇かしの手だった。

「え、とんでもない。仕事は、たいへんに進捗して居ります。ちと、こつちを巡覧していただきましょう」

油学士は、猿が飴玉を口に入れたように頬をふくらませ、主席を案内していくところは、毎朝多少ちがつていたが、結局、主席が最後ににこにこ顔で腰を据えるところは、外ならぬ人造人間戦車の主要部分品であるところの人造人間が、山と積まれている倉庫の前であった。

(やあ、いつ見ても、ええものじやのう)

主席は、心の中で、すこぶる満足の意を表ひょうするのであった。

そこには、出来たばかりの人造人間が、ぴーんと硬こうちよく直したまま、ビールの空壘あきびんを積んだように並べられてあった。実に、世にもめずらしい光景であった。

「おい。油学士。この人造人間は、もううごくようになってるか」

「いや、まだでございます」

「なんじや。うごかないものを、どんどんこしらえて、どうするつもりか」

「すべて合理的な能率的なマツス・プロダクションをやって居りますです。人造人間をこしらえるときには、人造人間だけをつくるのがよいのであります。主席、どうか製作に関しては、いつも申上げるとおり、すべて私にお委まかせ願ねがいたいものです」

「それは、委せもしようが、しかしこんなな一時に作っても、これが万一やりそこないであつて、さつぱりうごかなかつたら、そのときは一体どうするのか。百万台をまた始めからやりかえるのは困るぞ。それよりも、一台の人造人間戦車に必要な各部分を一組作りあげ、それで試験をしてみても、うまく動いてくれるようになれば、次にまた第二の戦車を一組作るといったように、手がたくやつてもらいたいものじや」

「鑿主席は、かくも見事な重工業地帯を完成しても、その昔、英米から売りつけられた碌に役にもたない兵器に懲りた経験を思い出し、また重慶で、しばしば嘗めた不渡手形的援鑿宣言の苦が苦しさを想い出し、すべて手硬い一方で押そうとするのであった。

しかし油学士は、反対であった。

「御心配は、御無用にねがいたい。天下に有名なかの金博士の発明品に、作ってみて動かなかつたり、組合わせてみて働かなかつたり、そんなインチキなことがあるはずはありません。現に、私が博士のところを辞しますときに、博士からこの人造人間戦車の模型を見せていただきましたが、実にうまく動きました。大したものでした」

「お前は、動かしてみたかね」

「はい。もちろん、上海では、やってみました。戦車を動かしますのは、渦巻気流式エンジンというもので、じつにすばらしいエンジンですな」

「渦巻気流式エンジンというと、どんなものじゃ」

「これは金博士の発明の中でも、第一級の発明だと思えますが、つまり、気流というもの、決して真直に進行しませんで、廻転するものですが、その廻転性を利用して、一種

の摩擦電氣を作るんですなあ。その電氣でもって、こんどは宇宙線を歪まして……」

「ああ、もういい。渦巻氣流を応用するものじゃと、かんたんにいえばよろしい」  
頭が痛くなることは、頭の大きい醬主席にとつては、苦が手であった。

渦巻氣流式エンジンは、もうすっかり出来上つて、倉庫に一万台分が収めてあるときかされ、主席はやつと機嫌を直したのであった。

彼等は、夢中で話をしていたので、ついに氣がつかなくなつたけれど、このとき、この二人の後にある堀の上から、色の黒いオーストラリア原地人の首が五つ、こつちを覗いていたのに氣がつかなくなつた。もちろん、その首の下には完全な胴や手足がついていたわけで、彼らは、きよときよとと山積された人造人間に、怪訝な目を光らせていた。

「おい、たいへん、たいへん」



五人の原地人<sup>せつこう</sup>斥候は、酒をのんでいる 酋長<sup>しゅうちやう</sup>のところへ、とびこんできた。

「なんじゃ、騒<sup>そうぞう</sup>々しい」

「たいへんもたいへん。あの醬<sup>しやう</sup>なんとかいう東洋人の邸<sup>やしき</sup>の中には、死骸<sup>しがい</sup>が山のように積んであります。あの東洋人は、弱そうな顔をしていたが、あれはおそろしい 喰人種<sup>しよくじんしゆ</sup>にちがいありません。たいへんなものが、移民してきたものです」

「えつ、それは本当か。死骸が山のように積んであるつて、どの位の数<sup>すう</sup>か」

酋長は、盃<sup>さかずき</sup>を手から取り落として、胸をおさえた。

「その数は、なかなか夥<sup>おびただ</sup>しい。ええと、どの位だったかな」

「そうさ、あれは、たいへんな数だ。九つと、九つともう一つ九つと、九つとまだまだ九つと九つと九つと……」

斥候は、汗を額からたらたらと流しながら、妙な方法で数を数えた。

それを聞いている酋長の方でも、だんだん汗をかいてきた。

「もう、そのへんでよろしい。お前のいうところによるとこれはたいへんな数である。わしが生れてこの方<sup>かた</sup>、この眼で見た鳥の数よりもまだ多いらしい。よろしい、これは、ぐずぐずしていられない。者共<sup>ものども</sup>、戦争の用意をせよ」

「えつ、戦争の用意を……」

「そうだ、かの醬軍と闘うんだ。わが村の忠良ちゆうりようにして健康なるお前たちやわしが死骸しかいにさせられない前に、あの醬軍の奴やつばらを、あべこべに死骸しかいにしてしまふのだ。どうも前から、いやな奴だと思つていたよ。彼奴きやつは、おれたちのところから、カンガルを何頭、盗んでいったかわからない。その代金も、ここで一しよに払はらわせることにしよう。それ、太鼓たいこを打て、狼烟のろしをあげろ」

「へーい」

とんだことから始まって、たちまち戦雲はふかくサンデー砂漠の空にたれこめた。

村の騒ぎは、醬軍の方へも知れないでいなかた。

醬主席は、重工業地帯からちよつと放れたところにある望楼ぼうろうへのぼって、村の様子を見渡した。

太鼓は、いやに無気味な音をたてて鳴り響いている。九本の狼烟は、まるで竜巻のコンクールのように、大空を下から突きあげている。その合図をうけとつた原地人が、砂漠の東から西から南から北から、蟻ありのように集り寄ってくるのが見られる。なんという夥しい数であろうか。千や二千ではない。すくなくとも万をもって数える夥しい原地人の数であ

った。

醬は、これを見て、ちよつと顔色をかえたが、すぐ思い直したように、瘡やせた肩をそびやかせて、強しいて笑顔をつくつた。

「ははは、たとい、あの何万の原地人が攻めて来ても、われには人造人間戦車隊があるんだ。鋼鉄こうてつせい製の人造人間に命令電波をさつと送れば、たちまち鋼鉄の戦車となつて、貴様たちを、苺いちぢいクリームのように潰つぶし去るであろう。わが機械化兵団の偉いりよく力を、今に思いしらせてやるぞ」

と、そこまでは、威勢いせいのいい声を出して、見得みえを切つたが、その後で、急に情なさけない声になつて、

「……しかし、大丈夫かなあ。油学士の奴、おちついていやがつて、部分品を作つて数を揃えたはいいが、未だに試験をしていないのだ。電波のスイッチを入れたとたんに、うまくスクラムとやらを組んで戦車になつてくれればいいが、万一人造人間の愚鈍ぐどんな進軍だけが続くようでは、原地人軍は、その間に人造人間の頭の上をとび越えて、わが陣営へ攻めこんでくるであろう。ふーむ、こんなにわしに心しんつう痛いたをさせるあの油学士の奴は、憎んでもあまりある奴じゃ」

すると、うしろで、えへんと咳せき払いがした。主席は、はつとして、うしろをふりかえってみると、何時いつの間に現れたのか、そこには当の油学士が、いやに反そり身みになって突立つっていたではないか。

「ああ齣う主席、あなたが心痛されるのは、それは一つには私を御信用にならないため、二つには金博士を御信用にならないためでありますぞ。金博士の設計になるものが、未だ會かつて、動ふかなかつたという不ふ体てい裁さいな話を聞いたことがない。主席、あなたのその態度が改かめられない以上、あなたは、金博士を侮ぶ辱じよくし、そして科学を侮ぶ辱じよくし、技術を侮ぶ辱じよくし、そして……」

「やめろ。お前は、まるで副主席にでもなつたような傲ごうまん慢まんな口のきき方をする。見苦しみいぞ。わしはお前には黙もくっていたが、こんどの人造人間戦車が、満足すべき実じつ績せきを示した暁あけぼのには、お前を取立てて、副主席にしてやろうかと考えているんだ。しかし実績じつせきを見ないうちは、お前は一要ようじん人じんにすぎん。——どうだ。本当に大丈夫か。仕した度たくは間に合うか」

油学士は、かねて狙ねらっていた副主席の話を、思いがけなく齣うの口からきかされたので、彼は処しよ女じよの如ごとく、ぼつと頬ほを染よめ、

「大丈夫でございますとも、丁ちやうど度ど只今ただいま、一切の準備ととのが整ととのいました。仍よつて、夕陽ゆふやうを浴よび

て、輝かしき人造人間戦車隊の進撃を御命令ねがおうと思つて、実は只今ここへ参りまして、ようなわけで……」

と、油学士は、急に慎しみの色を現して、醬主席を拜したのであつた。

## 5

戦機は熟した。

全身に、妙な白い入墨をした原地人兵が、手に手に、盾をひきよせ、槍を高くあげ、十重二十重の包囲陣をつくつて、海岸に押しよせる狂瀾怒濤のように、醬の陣営目懸けて攻めよせた。

これに対して、醬の陣営は、鬨として、鎮まりかえつていた。

ただ、かの醬の陣営の目印のような高き望楼には、翩翩と大旗が翻つていた。その旆の下に、見晴らしのいい栈敷があつて、醬主席は、幕僚を後にしたがえ、口

をへの字に結んでいた。

この望楼の前には、百万を数える人造人間が、林のように立って居り、その望楼の後には、これは赤い血の通った醬軍百万の兵士たちが、まるでワールド・シリーズの野球観覧をするときの見物人のような有様ありさまで、詰めかけていた。

雲霞うんかのような原地人軍は、ついに前方五千メートルの向うの丘のうえに姿を現した。

「おい、油学士。もう人造人間をくりだしてもいいじやろう」

「はい。只今、命令を出します」

命令は出た。

人造人間部隊は、たちまち一せいに手足をうごかして、前進を開始した。冷かひい灰白はいくしよ色くの身体が、夕陽をうけて、きらきらと、眩まぶしく輝く。

この人造人間は、精巧なる内燃機関で動くのであって、別に不思議はない。

人造人間部隊が肅々しゆくしゆくと行軍を開始して向ってきたので、原地人軍は、さすがにちよつと動揺どうようを見せた。が、先登せんとうに立つ勇猛果敢ゆうもつかかんな酋長は、槍を一段と高くふりまわして、部下を励ました。

人造人間部隊は、肅々と隊伍を組んで進む。どこか算盤玉そろばんだまが並んだ如くであった。

「おい、油学士。もう始めてよかろう。わしは早く見たいぞ。見て、まず安心をしたいのじゃ」

「はい。では、スイッチを入れましょう。まず第一のスイッチでは人造人間がばらばらと寄り、見事なスクラムを組んで戦車と化します」

「早くやれ！」

「では、——」

スイッチが入った。人造人間部隊は、その瞬間にさっとどよめいた。

がちやがちやがちやん——と、まるで長い貨車の後から、機関車がぶつかつたときのよな音がした。と、なんとという奇観きかん、人造人間は、吾れ勝ちわがに、身体を曲げて車輪になるのがあるかと思うと、四五人横に寝て、鋼こう 鋏せんとなるものもある。それがたちまちのうちかざなに折り重かさなつて、びっくりするような立派な戦車に組くみ上あがつてしまった。

ああ、一万台の人造人間戦車隊の出しゅっげん現げん！

「うーむ」

齧主席も、これにはよほど愕おどろいたと見える。

「では、この辺で、いよいよ第二のスイッチを入れ、かの人造人間戦車に、全速力進撃を

命じ、蹂躪させます。よろしゅうございますか」

醬主席は、まだ咽喉から声が出てこないで、黙って頷いた。

「では、只今、第二のスイッチを入れます。はい」

懸け声と共に、第二のスイッチは入った。

すると、一万台の人造人間戦車は、とたんに、ぶるんと一揺れ揺れた。と、たちまちものすごい勢いで、がらがらと疾走を始めた。但し原地人軍の方へ向って前進しないで、何を勘ちがいたか、あべこべに、醬軍の方へ向けて、全速力で後退を始めたではないか。

呀っ！

それは、ほんの一瞬間の出来事——いや、悪夢であったように思われる。一万台の人造人間戦車は、電撃の如く、呀っという間に、醬主席をはじめ全軍一兵のこらずを平等にその鋼鉄の車体の下に蹂躪し去り、それから尚も快速をつづけて、やがて、そこから三百キロ向うの海の中へ、さつとしぶきをあげて嵌りこんでしまった。

あまりに意外な勝戦に、原地人軍の酋長は、それ以来、自分が神様の生れかわりであると信ずるようになったそうである。



一体、なにがこう間違つたのであるか。

これについて、後日、わが金博士はこのことを伝え聞き、そしてしずかにいったことである。

「あいつは、大馬鹿者じやよ。渦巻気流というものは、北半球と南半球とでは、あべこべに巻くのだ。あの設計図にあるのは、北半球用のエンジンだ。南半球で使うときには、線輪をあべこべに巻かなければ、前進すべきものが後退するのじや。油踏天のやつに、組立のときは知らせよと、よくいつて置いたのに、彼奴め、自分だけの手柄にしようと思つて、知らせて来なかつたから、あんな間違いをひきおこしたのじや。惜しいものじや。たつた一言、これは南半球で実験をするのですと教えてくれればよかつたものを。……まあ、それが、積悪の醬や油の天命じやろうよ」



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年6月

入力：tatsuki

校正：まや

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人造人間戦車の機密

——金博士シリーズ・2——

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>